



福島市平局南町内
六六六(平局)毎日新聞社
株式会社編集部
印行(平)一〇番
電話(020)一〇一〇

御愛下

新方室

大樂武男
6 H.R.

磐高

蘆の湖

熱海から十國峠

をバスに乗つて下りるところ水に出る、ここに山を

軽走する、鞍掛

山の尾根を下つて前方に鏡面を

むとす

見た、蘆の湖で

神さびる松のおち葉をたゞ

ある、我々は元

受けぬ、

手を清めた

て手を明した雲の數片が湖上を南に走ら

く廻ると果なく湖が廣が

根町の考古館に納められた

工藤けつねを討たんと大

が出来た、詩思に久しくふけ

蘆ノ湖に突きで岬の機にな

之を預り相当嚴重な取締り

をしたらしくその遺品は箱

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

遊覽船が岸をはなれると館

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

遊覽船が岸をはなれると館

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

遊覽船が岸をはなれると館

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

遊覽船が岸をはなれると館

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

遊覽船が岸をはなれると館

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

遊覽船が岸をはなれると館

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

遊覽船が岸をはなれると館

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

遊覽船が岸をはなれると館

の二階から女中達が白いハ

シカチーフを振りつつ別れ

を惜んでいた倒さ富士はも

の起伏したなめらかな緑の

姿を鏡に美しく照してボ

トの行く手に優壯にそび

て乗り出さないでは、いられ

ない、かいをとり、三度

え立つた

腕を前後した、ボートは岸

脇ひおきし歌を忘れて漕ぎ

う水底に見えない、駒が岳

に手を清めた

て友と漕ぐ、私は始めて經

れず、濃い縁山を抱いてそ

